

ああ、 結婚！

—婚活日記—

第27回

黒田長宏

<2023年5月22日>

それにしても結婚難問題は自分自身を筆頭としてまるで何も動きがない。これでは小説にもドキュメンタリーにも漫画にもドラマにもならない。こうした状態のほうが現実には充満しているはずだと思うのだが、あまりに発表される場というのはそういう現実と逆になっている。だから発表という行為には幾分にも粉飾懸念があるのではないかと疑っている。

<5月28日>

人生は急に終えるかもわからないものの、結婚に関しては急には起こらないだろう膠着状態の中、こういう現実があるのだというのを証拠として残すためにこの一文を書いてみた。

<6月11日>

結婚にさらに難しい56歳になってしまった。『婚難救助隊』のYouTubeがきりよく280人の登録になったが、これは上下する数値だ。年齢は上下しない。

<7月16日>

さすがに暑い日々となっている。清宮幸太郎びいきの日本ハムファイターズファンになってしまったが、1点差で7試合連続で負けているというプロ野球記録に付き合ってしまう、清宮も今ひとつ調子を落としてしまい、結婚難問題を自らも含めて解決をどうすれば良いのかと、気持ちが悪く動いている。しかし私の状況より日本ハムのほうが簡単に好転するだろう。

高校時代に書店で得た、石川達三の『生きるための自由』は、徳川時代の自由あたりでずっと止めてしまったままだが、それより前に、『新潮』に昭和47年頃から数年連載していた、『流れゆく日々』は7巻のうち、3巻めまで読み進めた。どちらも現在は絶版だろう。石川さんは私が高校生の頃まで生きていたらしく、一度くらいお話を聞いてみたかったが時すでに遅し。この人は生涯にわたり、男女関係の混乱を嘆いていた人

で、かなり頻繁にそうした<ウーマン・リブ>思想の破壊的な面を批判している。こうした情報が隠蔽されて、今の壊れた日本、結婚できない日本があるのだろうが、50年前に石川さんは日本の人口が多すぎるとか、どうすれば子供の数をコントロールできるかというような、現在と真逆のことを書いている。当時はまさか結婚難時代が来るとは石川さんも思えなかったんじゃないかな。

<8月7日>

マガジンの54号の締め切りの通知が来たのをみたら、直観的に希望の活力がこのごろ無くなった原因がもしかしたら、マッチングアプリを全部辞めてしまったからかも知れないと思った。

実生活でも結婚できず、ダメでもともどもマッチングアプリで新しい人を募集しまくっているうちに、気が紛れていたのかも知れないところ、辞めてしまったので希望が持てなくなったのではないかな。

だからと言って、無駄なマッチングアプリを再びはじめても結婚できないだろう。期待の YouTube 活動は、上がり下がりがあるものの、打率よりは落ちないようではあるが、現在のところ301人の登録数となっている。

<8月12日>

私の56歳という年齢が、世間の固定観念に影響されて、結婚とか再婚という

面に高い壁として立ちはだかり、この頃急激に敵わないのではないかという意識が強くなり、悶々としている状態が続く。他には、日本ハムファイターズの清宮幸太郎選手をけっこう応援し始めてしまったことがあるが、結婚関係で繋げてみると、彼のお父さんはラグビー界のお偉方であるが、私と同学年の人らしい。

私は、結婚難は、男女関係の乱れた社会意識の影響の蓄積だと思っているのだが、50年前に芥川賞初代受賞者でもある、石川達三さんが、その頃芸文誌『新潮』に連載していた、『流れゆく日々』が参考になると思い、読み進めている。7巻あるのだが5巻まできた。三島由紀夫の事件や、浅間山荘の事件など、田中角栄のことも書かれているが、物価高は、私も子供の頃に思い出があるが、似たような時代であるようだが、50年前は世界的に、実は日本でもこのままでは人口爆発になると危惧され、家族計画など、現在と真逆の状況であったことに、実は現在の少子化問題のヒントがあるのではないかと思っている。石川さんは時代に染まってしまい、人口抑制しなければと憂慮されていた。ここで連載されていたのは、日記形式であるが、『流れゆく日々』が日記形式であることから、私もどこかしら石川さんのような文章をここで残せないものだろうかともっと意識すべきだろうと思ったりするのだが、素質や人間力の問題は言い訳であろう。

茨城新聞を勤務の休日に数日分まとめて読むのが朝一番の私の日課だが、

立岩真也さんの訃報が掲載されていた。この方が、対人援助学会の主催であろうところの立命館大学の先生だと言うことを私は知っていたので、きっと対人援助学会の先生にも一緒に学ばれてきた先生方がいるのかも知れないと予想していたが、予想するまでだったが、訃報をみて、少しネットで調べてみたら、『生存学会』だろうか、対人援助学会の先生方の中に、重複されている方を数名見つけ、仲間の死というのはとてもショックだろうと思われる。

なぜ私が立岩さんを知っているかという、名前だけだったが、私が今の職場で14年半の勤務になっているが、それまでは40歳頃まで、3年続いた勤務先が無く、20社近くは転職したかも知れないが、このまま私の人生はどうなってしまうのだと危惧していたところ、書店で、青土社の『現代思想』の2009年12月号だっただろうか、2006年かな？タイトルが、『自立を強いられる社会』という号で、そこに『ベーシック・インカム』が紹介されていて、私のように仕事の続かない人間にはこれだと思い、そういう関係の号には、立岩さんが巻頭の言葉のような位置づけでいらっしまったため、名前を知っていたのであった。ただ、立岩さんがどういう考え方の人だったのかは、書かれている内容が難解で、今も知らない。しかしそれでは失礼だから、執筆されたものを読むべきだと思う。

私は繰り返しになるかも知れないが、56歳であるが、たしか10歳も年齢が違

わない方だと思う。今の時代だと若いと言われてしまう年齢だと思う。しかし、社会的に不器用な人達にとっても難しい年代だと思う。

ベーシック・インカムはなんとしても実現して欲しいと思い、10年以上も前になるかも知れないが、執筆者の何人かには会いに行ったが、住所の関係で関東地方の先生方に会いに行ったのだった。関西は遠かったので立岩さんには会えなかった。今は、結婚難問題だが、それまでは食料問題からお金の問題に関心があった。結婚は生存に通じるし、対人援助なら仲人の事だと思う。